



日用心法鈔三編

上

9
3456
6



この本は何事^{なんじ}も^あく^と。い^まの^まま^ま真^{まこと}先^{せん}（た^た川^{がわ}橋^{はし}の^の尻^{しり}を^をき^きあ^あて^て）
何^{なん}の^の相^{さう}終^{しゆう}も^も出^で来^きが^がく^くと^とい^いふ^ふ事^じを^をか^かき^きた^たる^る本^{ほん}也^{なり}。い^いお^お小^こ米^{まい}ひ^ひ
か^かく^くて^てい^い日^ひも^も送^{くわ}る^るが^がじ^じ命^{いのち}も^もた^ため^め手^て人^{ひと}間^まの^の交^{まじ}り^りも^も出^で来^きが^がく^くて^て
是^{こゝろ}み^みす^すの^の飯^い米^{まい}小^こ米^{まい}ひ^ひの^のを^を安^{やす}く^く出^で来^きる^るは^は段^{だん}を^をか^かき^きた^たる^る本^{ほん}也^{なり}。
飯^い米^{まい}小^こ米^{まい}の^の澤^{さく}山^{さん}み^みる^るし^しき^きと^と思^{おも}ふ^ふ人^{ひと}か^かあ^ある^る禁^{ふし}を^を見^みる^る也^{なり}。

平かふ

日用心法鈔三編

上中下三冊

珍入

東都下谷金枝

天保十一歲八月

壽福軒述



自序

三

夫^そ世^よ間^{かん}の^の人^{ひと}を^を見^みる^るは^は酒^{しゆ}宴^{えん}拵^{ぎう}毎^{まい}芝^し居^こ角^{かく}力^{りき}を^を好^{この}む^む人^{ひと}の^の
澤^{さく}山^{さん}み^みる^るは^は家^け業^{ぎふ}を^をす^すき^き好^{この}んで^てつ^つと^とむ^むる^る人^{ひと}至^{いた}る^る希^{まれ}也^{なり}。
又^{また}以^{もつ}飯^いを^を澤^{さく}山^{さん}み^みた^たべ^べる^る人^{ひと}あ^あま^また^た米^{まい}穀^{こく}を^を澤^{さく}山^{さん}み^み貯^{たくわ}置^お
く^くた^たべ^べる^る人^{ひと}至^{いた}る^る希^{まれ}也^{なり}唯^{ただ}ひ^ひて^ても^もあ^ある^る。用^{もち}意^いも^もあ^ある^る。い^いふ^ふ
た^たべ^べる^る人^{ひと}を^をう^うり^りあ^あり^り。夫^そよ^よて^ての^の常^{じよう}食^{じき}と^と常^{じよう}飢^け饑^うふ^ふあ^あて^てつ^つま^ま
ら^らぬ^ぬ者^{もの}也^{なり}。又^{また}金^{きん}銀^{ぎん}を^をき^きふ^ふ人^{ひと}の^の澤^{さく}山^{さん}み^みる^るは^は金^{きん}銀^{ぎん}を^をり^りふ^ふ
け^ける^る人^{ひと}至^{いた}る^る希^{まれ}也^{なり}。あ^ある^るは^は是^{こゝろ}非^ひた^たみ^み家^けを^を失^しひ^ひ身^みを^を平^{へい}
ろ^ろへ^へし^し。非^ひ人^{ひと}を^を食^{じき}と^とあ^ある^る秘^ひを^をあ^ある^るぬ^ぬ此^{こゝ}事^{こと}を^をよく

べいこく

こしら

せんいち

志川く。全浪朱穀を澤山ふ調へる事を專要とすべ
し。拙ことを然る事年久し。是ふより引ては草紙
を集む。何卒家業を精し。儉約を守り。全浪朱穀
の澤山ふあるやうすべし。こと天下泰平國家安全
の根本也拙是をこひ預ふの己。無智をかへり見ず
接ふのやす

くさざん

むぐらんりう

あそ

トヤヤ

たとへ草本ありとも。無學文盲ふかく事ハ。
大ひみ悲る事あり。且又念佛の邪魔ふもあは
ハ後編切ふあう。跡にかく間鋪と思ひし所。又家業を

おと

オトキ

げくあう。書をもむみ際ふき者た。二人外川
く我等に存知通書をもむひまあり。あうりといつ
て書をもよまごをもよき道を通りかこ。今其詩
のかまし。書を見まを。かまのやうなあて大ひみ
考へる事ハ。身の爲家の爲ふもあう。何卒三篇
安心の場所へもあむくやうと思ひひ。何卒三篇
も。五へんも相認めん。まひやうみ。あう。き。念佛
の際をかきひ出。まひ。せ。あ。す者也。えん人
文字のあやまり。詞のい。さを。替む事。あう。

ひま

イキ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ

あそ



士農工商家業出精

日用心法 三編上 目録

- 一 何事ふもすべしといふ事 まうさた 四丁
- 一 口といふこと主人があらうといふ事 あつち 九丁
- 一 哉中候綱の尻叩かう老中への事 さうへ 十丁
- 一 人へい物を以てく樂との最上とする事 さうへ 十一丁
- 一 二年も五年も倦り盲目倦りつんがでも つく 十四丁
- 一 居やうけきた一日もたべずみ居る事 い 十四丁
- 一 天下の主とあつてもい飯をたへてあて役ふ立ぬ事 あつち 十七丁
- 一 家業へ休むけきた。いふ事へ一食も休まぬ事 いふ 十七丁
- 一 飯米小をひうふいと夫婦けんらう起るといふ事 あつち 廿丁

- 一 釋尊阿難あなん（赤真珠あまのたま）を取ると御説法の事ごせうわう 九二丁
- 一 悪人あくにんのふき御政事ごせいじを贈む事ほうむ 九三丁
- 一 家の興廢こうふいの奢あざむと儉約けんやくとみる事みる 三三丁
- 一 昔むかしの聖人せいじん方かたのおこりむらぬ事こと 三三丁
- 一 天照大神宮あまてらすかみのみやの宮みやに居いる事こと 三五丁
- 一 高き家の御製ぎよせい八雲やうむ立神詠たちかみよの事こと 三九丁
- 一 井田せいでんの法ほう十じゅうの法ほう四公六民しこうりくみんの事こと 四二丁
- 一 心の物もの小をひがふけとバ民惡事たみあくじをする事こと 四五丁

日用心法三編上

○ 節縮せつしゆくふもりの通りちよと。六むの事こと合あふも。喰く飲いんが真先まきさきのたけ。湯飯あつめしをたべず煮ていもあ。いぬ末すえかた。後あと後ご不ふ後ご後ご。くいのそが真先まきさきのたけ。何なんも付つても。くいのそのをあると。いぬ事ことあり。まも一日いちにちふへん。くへんあふけきた。みだもあ。たべむか。あてたまりかた。くひてい又またくひ。くひてい又またくひ。くひ事ことをかりわわけてい。端金へんがねと洗せんふ又座ざふあかける。くひのそが商賣あやうばいあり。かせぎするひまあり。商あやうばいひも耕こう作さくも出来できかた。くひ事ことをかりわわけて居いる。身み上うへのまゝくある事ことあり。ふとさをつけ祿ろくをぬい減へん七しちふらぶべ。身みふ

つとめ
 ○勤ても又つとめてもつとめてもつとめなぬ。つとめありけり
 けうこの世をよく老いて。いものより。つとめ勤く事を勝やう
 ふすべし。大方の人から事ふに随分とおどり。せいだしてうふ
 けきとも。つとめなぬく事ふに勝出する人至て希あり。又仕事
 の明日のむす人のことも。うふ事と明日のむす人あり。うま
 いおの買ふくとして取こしてうふ人の。沢山あるまども。仕事と
 取こしてする人あり。どうも老てもたへる事のおやく仕事。いそぐ
 あり。是では入見と出る見と。大遠ひあるまども。勤定のありぬ。答
 り。大晦日の勤定が。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 さすまむ一家二門の教よご。我々のえより。毒子けんぞく。延びん

ぎあんちうするあり。げ事とあはれあつて。人々。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 事上をよく。げすべし。皆人が苦勞する。いれあをわ。つまる。あまねく。事上
 がまゝある。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 かうふ。苦勞する。事。いれあをわ。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 死に事上。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 門の。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 深く。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 の。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。
 年々。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。あまねく。



全限さ(てんげん)沢山(さか)ふあまが
 かせ(か)こふとこもふとく
 又(また)つる不男(ふおとこ)でもふい男
 又(また)つる。ゆり(ゆり)ふ(ふ)合
 う(う)つふ(う)つふとき大(おほ)なる
 と又(また)つる。き(き)ん(きん)でも鬼
 化(け)でも。ち(ち)や(や)み(み)や
 が出入(でいしゆ)させてト(ト)こま
 と。た(た)の(の)き(き)う(う)る全限
 の威(い)光(くわ)入(い)大(おほ)ひる。
 り(り)の(の)あり



樂と云ふもの年々金限のふつるやど樂と云ふ威勢
もよくあり人の用ひもよくあるとあるべし

○孫ざめふも徳ある道を思案せよ枝葉のけあてふすまじ
○若きより年終る迄の樂と云ふ金とる道ふまくりのふふ
け哥の通ふ何が樂と云ふても毎年金限のふつる程の樂と
云ふとあるべし金限さつひまば芝居牡丹花見月見詰舞立
花等の樂もむの程也又人の用ひもよく万事自由自在を
得るあり金限がふつて何事の樂も出来がごとく又家賃
くいの物も追まるといふて花見も遊山も茶の湯立花等の樂
と云ふも出来がど貪る諸道の妨げ四百四病の煩ひも貪やど

つゞき物のありと云ふ諺ふてもよくあるべし金限がふく
て何首のふいよりおとりのありそこふあるかともいふ人
あり皆まづさうなる人むかりあり又近所ふもありがごとく
近所ふあるを直ふかりたぐる直ふ無むといひかけの儀ある
さくまで近奇と云ふし近奇さうふあるが貪者のかきうふ人
みさうと云ふるおよき人と云ふも出来がごとくこまふふの
て何卒福人とありおへたとひ儀を能たりた無益の事ある
らぬがよし無益の事いせぬがよし歌ふ
○身の爲ふ益ある儀とよくあるび辛苦ありたおふべき也
○世を渡る道は益ある儀縁の面白くともあつてふべからず

け二首の和奇をよく合意あてたとひ義縁たりた身の爲世
 の爲みふ事さあふべし。是人間のたしあふあり。何でも
 かでも病殺したべず居るまぬうゝあて其用を急度致
 すべし。若し用をさき人の急病死の人あり。ことふより益
 益の事少しもちふべからず。四も五もふいす。七の空腹も
 うへぐさ。況や三日も四日もたべずふの尚居りがたし。
 一日ふ二度への例てもそれでも。たべ給をぬとあるべし。
 ことふより例て。拙山おごり苦をゆめて。昼夜給ふつことめ
 ちとらくべし。人の爲もたらくふあらず。皆是疾苦
 のための働きあり。狂歌ふ

○はといふことといふ主人があら故に朝から晩までとせし
 人の爲に勤め働くよりあらず。皆我に當ることといふ主人の使
 るふあり。けし主人一日見てもさきと直に冥途の客とあ
 ることや恐ろしや。我流に極み美しき品物を急度用盡すべし。
 世の中み恐る事最上といふ人。流に極といふことといふ人。差
 上物のあひやど。恐る事事ハあきことあるべし。妖術がこととい
 幽霊が恐る事といふは。けし人殺したる者。あ
 ふし。けし流に極み美しき物あて昔。から死あたる者の後
 千万といふ救のあきこと。別て天保八酉年。杯の毎日死する
 者。皆流に極み美しき物の通り也。然るにけし流に極み美しき物のあ

い程。恐ろき事へのふきとあるべし。是ふよりして人の世の用
意の急度深すべし。深くは得玉へ

又親おやみつろとまに主人しゅじんみつろとまに妻子さいしけんぞくの爲ためみつろとまに

ると思ふべうす^{おもふべうす}皆我に^{たれ}の爲のつとめえたりきあり^{。けり}て

人ふつゝ思ふべからず。皆我身の爲めつとめなり。然る

ハ精進せいじんてつとめをさういて大敵たいてきをたへて何やども長命ちやうめいすべし

夫だ勤め働く事がいやあり。湯飯をたべよ。仕事は湯を無用ふり

い段々美知あふべ化者も世話ふけずあて安ん也保し冥

途のたひに立寄用意あるべし
たち二日を待す者て死ん事此に定ふ
つと

りこゝや惡ろゝや冥途のたひをせんよりの勅めをさうくへ

あつち
かゝささつが
びきんやちう
でう
で
あやう
まり

○松平越中守定信候序勅役中御用ニ付上京のつかさど。

草津の宿ふり泊りあり。その本陣の床の間に自左鍵ふ渦

のかけてある繪を後遊ばさるゝときたゞ
 ちとめんげん
 ち
 ときたゞ

度やいて民安全あり。焼ざる時の民くる志むそよりふやき

る。時、家をやりやり。国を失ふ。焼さる。む。変り。落し。高き。

家の清製も屍が立ちたり貴賤貧富は徳の屍より法歌子
トざいりぎ

○よきふれふむきよなるるへて世の人のとるに自互授也
きせんひん あべ あり たは まう まつちうとう

い上りの事なりて存知にて人達に通じたる大智者あり
おもうげ
ごえん
えん

べ。貴賤貧富たふ過の屍とをあきて入。一日も送りかた。貴賤

卷一百一十五

あし。我^{わが}ういし飯とあるは。貞^{さだ}延命^{えんめい}のちり本^{もと}さふ遠^{とほ}ひみ。
 知^しき切^きたる道理^{どうり}也。ふ年^{せん}生^{なま}る者^{もの}でも。万^{まん}年^{ねん}生^{なま}る者^{もの}でも。く
 拙^{せつ}があけきむ。若^わ元^{げん}世^{せい}秘^ひむあ^あぬ。況^{いはん}や其^{その}外^{ほか}の短^{たん}命^{めい}ある者^{もの}た^た。
 尚^{なほ}更^{さら}の事^{こと}とあるべし。是^{こゝ}ふより引^ひて見^みきたむ。くい拙^{せつ}やどさき
 拙^{せつ}あし。更^{さら}故^こふ花^{はな}よりだんご。みちより牡丹^{ぼたん}餅^{もち}。吉^{きち}原^{げん}へ行く
 葉^は漬^{づけ}らふがよ。花^{はな}えらふよりい合^あ飲^{のん}でそむらふがよ。何^{なん}
 でもいれけよりくいけといふふ相^あ遠^{とほ}あ。誰^{たれ}かあんといふても。
 伊^い飯^{はん}と小^こまひがあくてい。首^{くび}のあひよりもあとりあり。附^{つけ}本^{ほん}がひと
 さいみくても用^{よう}の豆^{まめ}が。況^{いはん}や飯^{はん}米^{まい}小^こまひがあくてい。拙^{せつ}更^{さら}の
 事^{こと}とあるべし。川^{せん}柳^{りゅう}がふも。二^{ふた}ッ買^かふたをやめて。そむ三^{さん}ッと云^い

い。た^た買^かふよりい。そむらふがよいといふむあり。
 〇ひもどきとさむこととあるは。さふむとむ。いもどきとさむせ。
 といふ身^みよてもよくさとるべし。伊^い飯^{はん}をたべずあてい。芝^し居^いも
 花^{はな}えも月^{つき}見^みも。至^{のぞ}そあし。芝^し居^い花^{はな}えも。一^{いつ}盃^{はい}のんで。うまいあを。
 沢^{さか}山^{さん}ふたべてこと。面^{おも}白^{しろ}けき。くさす。のまふて居^いてい。花^{はな}えも面^{おも}
 白^{しろ}き事^{こと}あり。花^{はな}むかりえ。月^{つき}むかりえ。又^{また}く面^{おも}白^{しろ}き事^{こと}あり。
 一^{いつ}盃^{はい}のんで。うまいあを。沢^{さか}山^{さん}ふたべてこと。面^{おも}白^{しろ}けき。のまふ。くさす。ひ。
 月^{つき}えも花^{はな}えも。花^{はな}えも面^{おも}白^{しろ}き事^{こと}あり。は。他^{ほか}者^{もの}のいふあ。他^{ほか}者^{もの}とて。つ。
 〇くいのそが。樂^{たのし}みの弟^{あに}あり。首^{くび}。唐^{から}土^どより。日^ひ本^{ほん}の何^{なん}を以^{もつ}て。樂^{たのし}み
 の弟^{あに}とする。やと尋^{たづ}ね。事^{こと}あり。其^{その}答^{こた}ふ。信^{しん}者^{もの}のいふ。仁^に義^ぎ

とむるひまあり。貪^{いんぐう}乞^きする筈あり。世の中いむりか。い筈あり。
是かろいむりたべぬやうふあてもらいませう。た候ふもある
まひかゝあて。是かろいむりたべぬあてたべて家業を怠度せの
だしてもらいませう。たもあくてい。常飢饉^{じょうきげん}常貪^{じょうぐん}乞^き常あんぎ
あり。是でつづきうぬ者あり。是ふいふて元日かゝる度むふ
かけて。大三十日の勅室のよく出来るやうふすべ。皆く篤とを
得む。目ふ花をえても口ぬが合長せず。といふ発句をよく合長
すべ。目ふ花をえても耳ふ降瑠理小歌三弦を叩ても。耳飯を
たべずあてい。口が合長せず。又くとす。のまふ。叩てい。なりが
た。あかろい。市口極が正義知の上で。あくてい。何事も出来

がた。又目ふ花をえずふ。二年も三年も居やうけ。また一日
く。とふふをりがた。耳も又年も七年もふさいで居やう
け。また口。一日もふさいで居りがた。二日く。とす。居を
座ふ冥途の幽霊とある。ことや恐ろしや。市口極の合長あつて
か。ふすべ。諸君子是をよく心得む。是をよく心得ざる
人。大に大鼻たふあり。智者学問といふとも。飯米小をひ
のふい。あまふてい。愚者も同義あり。智者がや。いといふ
も。飯米小をひの沢山ふらるやうい。こ。度為あり。ひつぎ
業文するも仁義禮智信の道を行ひて清浄ある天孫を得て。
身分相良の飯米小をひの何。やうふせんが為あり。四の五のい

とも仰ふ子細あり。苦勞するも貴方もつまずる所底あり。口を埋ぐ為ありけ池のいづう埋ても何となく穴のつくけきまむ。人々小販てい基と六ヶあきうめあり。け池を埋るむかりみ。生使ひたをさるゝまり。何れども貴方てけ池を埋るゝ夫をいこまべ。け池を埋るゝふあひての智者も智者ふいゝず。学者も学者ふいゝず。邪智邪学あり。各智を学でも飯米小巻ひふ。美傳るゝ人をふいゝ人といふべ。一身一命の段に相海や。○天下の主とありても。歩飯をたへずあての樂とあ。めんぎめんをうゝあり其あやう。建武御一統の後。大塔の式吉野より帰降老あひ諸將万歳を賀。奉る時。

宮仰せありけるハ吉野熊野の間流浪の時ハ天下を懐んと思ふかゝるゝ何率唯序米の飯一梳かゝくたへと物也と思ひ。をかりありと語りふひ。名和伯耆守長年。是を聞て桑田の後楠正成ふ向ひ右の物語りをあて宮もいふ。飢ふ苦とあふた天下を懐んと思ふかゝるゝ杯ハ邪劣子万の至り也と申しけ。まを正成答ていふ。貴殿ハ終ふ夕飯の進きめも建ひひた。事あるま。まをふひ。このめんぎをあらう。三日も四日もたへず。居てハ天下も大名も。唯一梳の序飯を呈む。かりありと申し。まけま。長年返答ふくあて。くしけ。とかや。よろけ。



楠正成

大塔の宮建武
御一統の後吉野
より帰洛し
諸將万歳を賀
奉る所

名和伯耆守



かんふんを。実ふあうづる人の公得ふく。あて身とあする。
事^ふ考^ふかへべ。け事^あ浅きふ。他^いこま深き道理^ああり。終^く
考^えへんあへべ。とありある。と天下の主とあつても。餓^う餓^うを
たべず。あて入樂^いもあ。命^{いのち}もつふざ。と。名將^{めいしやう}を以て名^め
城^{じやう}は格^{かく}強^{きやう}り。軍^{ぐん}平^{へい}百万あり。た。兵^{へい}糧^{りやう}ふき時^{とき}入^い忽^{たちま}ち亡^{やう}ぶと
いふ事^{こと}ハ孫^{そん}吳^ごが。秘書^{ひしやう}ふん。と。兵^{へい}糧^{りやう}半時^{はんじ}あ。とき時^{とき}入^い軍^{ぐん}平^{へい}
役^{やく}立^{たち}が。是^{こゝ}は。是^{こゝ}は。い。て。兵^{へい}糧^{りやう}をつ。と。役^{やく}人^{にん}ハ至^{いた}て。大^{だい}事^じ
あり。と。漢^{えん}書^{しやう}ふん。たり。終^くは。是^{こゝ}は。程^{ほど}の。大^{だい}事^じ外^{がわ}ふ。何^{なん}事^じ
も。餓^う餓^うを。たべ。と。あて。入^い用^{よう}入^い調^{てう}ひ。が。と。切^き立^{たち}が。と。是^{こゝ}は。と。
大^{だい}切^きふ。餓^う餓^うの。用^{よう}意^いも。せず。あて。う。う。と。接^{せつ}んで。う。う。と。あ。と。

小^{せう}長^{ちやう}。益^{えき}あき事^{こと}と。ば。悪^{あく}事^じふ。を。ひ。捨^{すて}る。採^とり。あ。り。う。る。答^{こたへ}
あ。の。を。智^ちと。い。ふ。べ。又。餘^{あま}力^{りき}も。あ。る。と。世^せ界^{かい}の。為^{ため}ふ。あ。る。
事^{こと}と。ば。飢^う饉^{きん}の時^{とき}ハ。貧^{ひん}民^{みん}も。あ。る。と。い。た。き。もの。あ。り。
是^{こゝ}は。人^{ひと}の。上^{うへ}に。立^{たち}る。い。は。け。あ。り。也^{なり}。民^{たみ}の。父^{ちち}母^{はは}と。い。ふ。事^{こと}ハ。民^{たみ}の。
為^{ため}ふ。あ。り。民^{たみ}の。益^{えき}ある。事^{こと}と。す。る。也^{なり}。け。事^{こと}と。す。る。と。い。ふ。得^えて。慈^じ悲^ひ
若^{じやく}根^{こん}を。ひ。ふ。べ。万^{まん}民^{みん}の。上^{うへ}に。居^いて。父^{ちち}母^{はは}の。ひ。あ。き。天^{てん}の。罪^{つみ}
人^{ひと}あ。へ。よく。考^{かんが}へ。う。る。べ。若^{じやく}を。ひ。ひ。て。世^せ界^{かい}の。人^{ひと}よ。と。
せ。と。も。一^{いつ}生^{せい}。悪^{あく}を。ひ。ひ。て。世^せ界^{かい}の。人^{ひと}ふ。惜^{うれ}し。と。い。ふ。と。も。
一^{いつ}と。あ。う。と。答^{こたへ}を。あ。て。世^せ界^{かい}の。人^{ひと}よ。と。せ。と。も。と。い。ふ。と。相^{あい}合^あふ。と。
く。と。す。と。安^{やす}公^{こう}福^{ふく}徳^{とく}の。い。ふ。べ。か。う。す。け。事^{こと}と。す。る。と。深^{ふか}く。思^{おも}ひ。う。と。あ。つて

吾をぬいてくまへ

○又大方の人が。ていねいふもべき事を。ざうとあて早くはま
て拵いたがる。是れといふひろあまが。おの事抱強く機根
つよくせねむ成然一が。おのふ仕事へろくくみせず
志て。飯の甚時くも急度たべる。甚間おも隨分とたべる。おま
たつとめ働く事へ。あまひて。喰くとのむす。又立たる棒を横つ
もつとこぬ生皮者なり。虫飯の決必もあき苦あり。身上の六ヶ
愛苦あり。誰もつとめ働く事へきういあり。おんで居る事へ
誰もすぎ也。おまを夫ふての。相濟不や一生の送りが。仕
舞ふの家を失ひを食とありて。大まんぎするあり。甚大まん

ぎをあら^{とく}て。若^もき時^{とき}より。つとめ働^{はたら}て。老^{ろう}後^ごの用^{よう}意^いする。あり。
 是^{こゝろ}を遠^{とほ}きま^{ちか}り。ある賢^{けん}人^{じん}といふ。是^{こゝろ}を終^はり。をよくする。智^ち者^{しや}と
 いふ也^{なり}。一切^{いっけつ}福^{ふく}徳^{とく}。つとめま^まく。より。よき。出る。事^{こと}也^{なり}。夜^よ食^{しき}
 住^{ぢう}の云^いつも。家^け来^{らい}を使^{つか}ふも。何^{なん}もか。も。つとめ働^{はたら}く。より。漏^{こも}出^でる
 事^{こと}也^{なり}。ある。小^{せう}仕^し事^じの。出^で来^きぬ。事^{こと}を。少^{せう}しも。苦^{くる}ふ。せ。ず。唯^{ただ}く。ふ
 事^{こと}を。より。考^{かんが}へ。て。居^いる。人^{ひと}。何^{なん}といふ。心^{こゝろ}を。ま。か。さ。し。一^{ひと}。
 も。仕^し事^じ。へい。や。あ。ま。た。夫^そを。せ。ね。む。た。べ。る。事^{こと}が。出^で来^きが。た。し。
 世^よの中^{なか}が。く。せ。ぬ。あり。是^{こゝろ}を。考^{かんが}ふ。心^{こゝろ}。何^{なん}でも。か。で。も。精^{せい}出^だて
 仕^し事^じを。せ。ね。た。あ。く。ぬ。者^{もの}也^{なり}。其^{その}勤^{きん}定^{てい}。あり。小^{せう}拵^{しやう}ん。で。居^いて
 く。ふ。事^{こと}を。かり。く。いた。が。り。つ。ま。く。ぬ。者^{もの}也^{なり}。又^{また}金^{かね}積^つを。き。ふ。事^{こと}

の志門て居た。ゆふけの事ハ少しもあらず。始終ハ貪
負する筈あり。大二十日の止つまハ何とぬ筈也。飯米小を小
こする筈あり。入用ハ多くあてり。ゆふけハ至て多くあり。金銀
のをひ道ハこゝらへて金銀をゆふける事ハ少しも
あらず。身上ハ何とぬ筈あり。能く考へて。是のうの家業を意
度お精進て金銀の出来るやうふはすべし。飯米小をの次山
ゆふけゆふけ。ゆふける事ハ次山よりゆふけて。入用ハすく
みゆふけすべし。右様ハゆふけても。入用ハ多くあり。取事
ハすくみゆふける者也。ゆふけるや家業ハ何とゆふけす。入
用をかり多くする者ハ。身上ハたす。ぬ筈あり。人々入道と出

る道ととふ合せて。甚やどく。世とてすべし。あるふ甚お海
あき人むかり。大ひよとす。事也。世間のあまら。者ども
け道理とよくあつて。家業を吐捨すべし。
○又親おかり。主人の飯をくらふ内ハ。飯米ハ米びりから
とさる。ゆふけゆふけ。小をひハ巾着から。ゆふけ。ゆふけ。居
こよ。飯米。我身上とあつて。見と。飯米小をひの吐所
あ。米びりをた。ひて。見ても。一粒も吐ぬ。巾着を。ゆふけ
見ても。一粒も吐ぬ。サ大。ゆふけ。金銀ハいつでも。たんすの
引出し。ゆふけ。と。思ひ。米ハいつでも。米屋から。おて。ある。と。あつて。居
こ。たんすの引出し。ゆふけ。金銀ハ。米屋から。米も。こ

さぬからあてサ大ごまり。是能たよあてあてぬ飯米あり。
 一日あくても。座ふ人命よかる。妻子けんぞくが。渴命よ及ぶ。
 大事のくの飯米あり。其大事の飯米小をひの用意も
 あくて海へきや兼りた。是程の大事をおみぐる家業
 へあすけてせず。毎日おんで居てうまいおとくいたがり。よい
 おをきこがり兼る小をひといつて色ぐら酒宴を喜ぶ
 目とくく。おごりふ長くて人をあんどり。己とをかり利
 根あかうふ思ひ。さうと風をする。大ひあるうつけ者あり。
 今ふを食とあらん事疑ひあ。智る者かうとを
 を。知止る方あり。あるふ支を利根ありとあて居る。人

鼻毛あり。世界中の持業者也。其事をよくあてて是より
 へを改め家業と世精なり。儉約をちり。所をよく脩め家
 と。飯米小をひの。沢ふあの中よりすべ。若し道理を毎
 ずあて。皮放湯せむ。貪食神へ引く。常飢饉常
 ふんぎのを食とあ。野原ふあさふ。させ。人間仲るを
 ひけし。畜生仲間へ入置べ。夫ふてもよろきや。
 わきや。返答うけたまふたり。サア早く。
 何卒身を惜む。家業と世精あて。米びつふ。いつも米の
 ず。小紋。巾着ふ。いつも小をひの。中よりすべ。いづ
 小家のいひ事。飯米小をひの。あより起る。裏借屋

の夫婦げんぐらひ多くいふ米びりのがうつきよりおこるとま
るべし。又大家の呉ひ二色くあきども多くいふ主人の不肖お
ふく起る事あり。是も身上が修く不如意あるやど大猶
ひとあるあり。是よりいひていづきの道ふも。身上とよくする
やうふすべし。身上をよくする所へ猶ひも成る。是身ふ
も心ふも慎むる友也。いづきの道ふも。飯米小きひの
やうふすべし。飯米小きひこへいふ事小言
ひあきあり。こまふよりいひて飯米小きひいふ意度あるやう
ふすべし。意度あるやうふするふい。意度心を用ゆべし。大
事の中の一大事也。一切のあんぎ苦勞もつする所いふ事を

よくせんが爲あり。外は子細あり。飯米小きひいひてもいひ
とあふい大回還ひ。唯いふ事を志して。いひあんとあきす。是
ふよりいひて不覺とある事多し。いひあんといふいふ事
く治め。家業と出精する事也。
○昔阿難尊者 釋尊ふ申し上る中より。如來の淨飯
大王の家ふたんとあて樹下は座する事。うづうふ六年あり。
志かふして道をことり。佛とありあふ。若かくのごとく
あふ。佛とある事。いふ易きこといふ。釋尊阿
難ふ告む。昔一福祐の長老あり。諸人の孤賤宝也。悉
く具りて一と志て不足あり。唯正赤色の真珠のこみ。

是を不豆ふ思ひ永めんが爲よ人を將て大海ふちむき。隙
 阻て志のさかんあんを經て。寶の渚さふ到り。身を刺て血
 せ出。油の囊ふいして海底ふ沈む。珠を胎めるまぐり
 け血の匂ひをかひで集り来りて。といくらふ昂ち囊を
 引奉て。まぐりの甲を割て正赤色の真珠を有。かくの
 ごとくする事。三年を經て余程の善珠を得たり。彼の同
 伴忽ち冥念をとおえて。長者を井の中へ推落。去て善珠を
 をひ取て。迦さる所たり。其時ふ長者。方便をりて。井を出
 て本国よかへり。彼同伴をたづね出。正赤色の真珠を取か
 へ。ふくらよいきて。寶を納む。志をりて。二人の小兒を

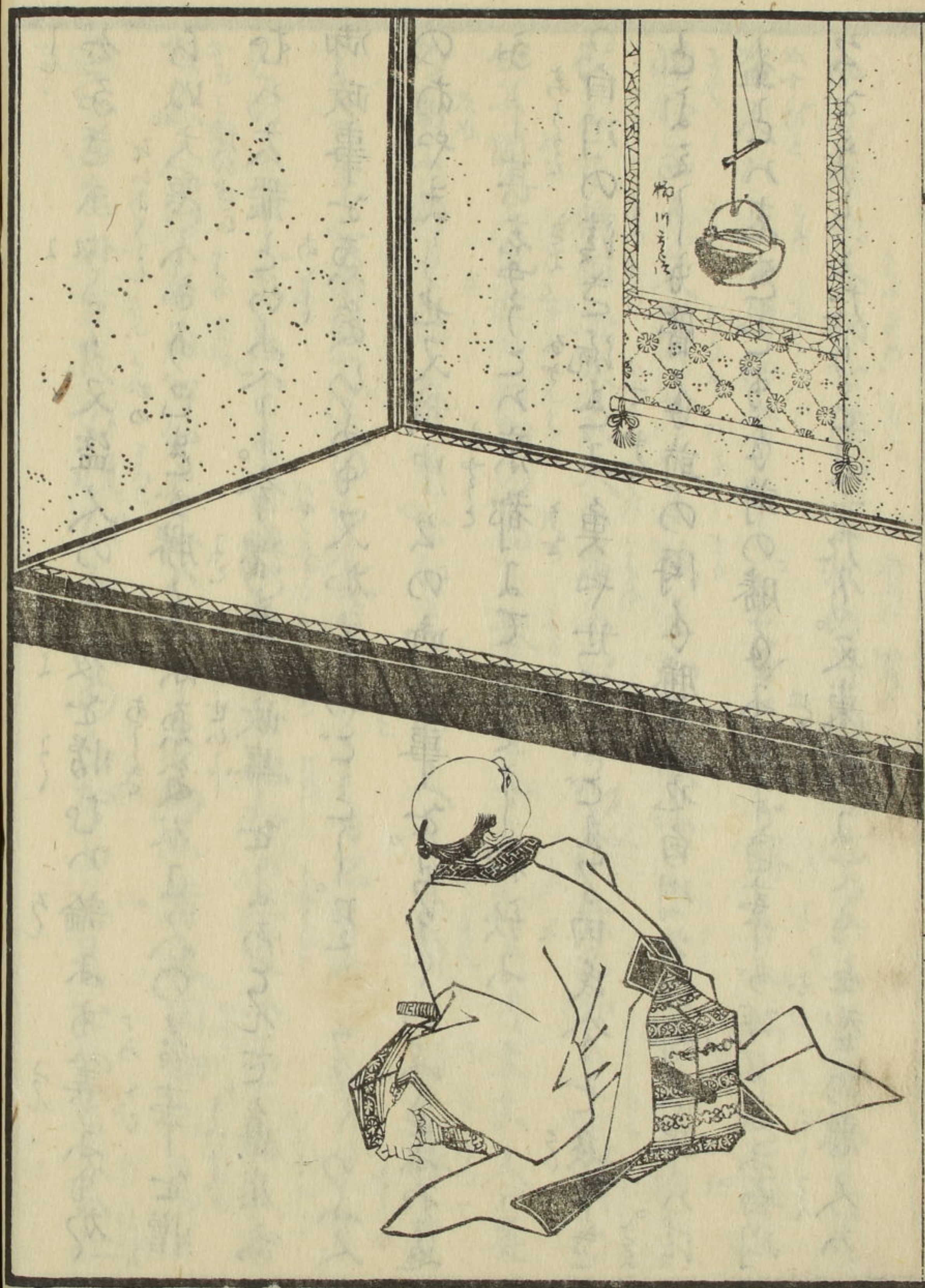
養育す。恩愛の何まりふ。其真珠をせして。是をりて
 何とびます。ある時父の長者。問ていらく。け赤真珠の何と
 の所より出。うやといふ。一兒のいらくふくの中より出
 たりといふ。一兒のいらくかめの中より出。うやといふ。父聞
 て大ひふ笑ふ。母も笑ふ。故を問つて。父答ていらく。吾あ
 まこのかんあんを經て。漸くけ真珠を取得たり。其かん
 へを經。一事を委細ふ物語り。とまへ。母ハ大ひふをどろ
 き。とあり。あるふ小兒ハ其本末をあらうむ。志て。唯かめ
 中。ふくらの中より出たりと思ふ。故ふ笑ふといふ。今
 も又あり。阿羅ハ只如来の成佛のをえて。多教勅の難

苦行ありし事をあらず。是を以て容易き事と思
り。実ふ如末とあるゆゑんとあつづるありとあり。今飯米
へ来びつかりあるやうふ思ひ。小をひハ巾をうとあるとある
人も。又かくのごとし。中々容易の事ふありと下。け事を
深くおめて。初年より。身を治め家業を治めて。飯米小
をひハ。いつでもあるやうすべし。是が一切禮義忠孝の本
源あり。且又人命ふもかる事をあまた。大事の中の一大事
あり。故と。とどくやかまし。いとあるべし。そまとも諸君子
の言を簡次す。
誠ふ樂翁君ハ。誠中々の上下の人情をよく存知ふて貴

賤貪福は禍の原ふありとハ。間違ひのふき事也。其上真
直ふ即政事ふて上下た。世を安穩に送りし也。樂翁福
の中にある人なり。あつづ。世間ふひ事ハ。あつづ。む。
国家よく治まりて万民愁ひあり。尔をた又たま。ふハ
誠中々の即政事を。く。いふ人あり。是ハ法をやぶる
悪人た。正道ある政事を憎む者あり。またふ昔より。
詩ふも。能り。歌ふも。む人。多し。伴敬宗が持し。い。春
雨膏の如きも。行人ハ甚泥濘を惡む。秋月光を揚るも。盗人ハ
其照の濫ら。あるを憎むとあり。け。ハ。春雨ハ田畑をうる。不
。他。草木の。高。ふ。け。た。旅。往。來。の。人。ハ。道。を。う。く

あるふ。春雨を悪む又秋の月のさしたるふき物あるた。
盗人の是を憎む者あり。是皆已まが勝ふふりきある
憎むあり。又憂喜人ふ依といふ歌ふ。ますう男が小田う
まとして待雨を大主人の花ふいとえん。秋のふも上の詩の
公小同ト百姓ハ田畑の爲は春雨をやりがきた。大主人の花
の爲ふありきとして。是をいといふ。皆人々前のは勝ふの
よき事を思ひて。人のあんぎを吹くも思ふぬ者あり。不実
といふべし。ふきとも百姓の春雨を好むハ正道ふきて。旅人や
大主人のまふといふハ私といふ者也。田畑の爲ふ
さるふきを万民の悦びあり。あながちふきをいといふハ仁

ふきふふ。又盗人の月夜を憎むハ論ふも善ふもか
らぬ。大悪人あり已まが勝ふふ思ふぬ。人の善事を憎
むハ大罪といふべし。今濁る政事をよろこんで。真直ふ
御政事を思ふふも又かくのごとし。是ハよろしく人
のあやまり也。又裁中么の御政事を。よろしくいふこお遠
ふ。其志かうこハ京都よてよこ。狂歌ふ
○白川の流き流きふ。魚やせて。ふごまる。田氏今ぞ哀き
とよこ。も皆前のは勝ふ也。白川么の御政事ハ流
し。とハ志きとも。前の勝ふふ。あき事。が。ある。白川
么。さう。たり。と。え。たり。又東都よても。無智の悪人ハ



け禍の鬼目よ三度やて
民安全也やうぶる所
民るまむきさるる所
家をやろす貴焼
貪福け禍の鬼あり
とゆかうまの所



そしりたるはね遠み。其志やうこふ

○落穂雑談一言集ふ曰。松平越中守殿御補佐の良学文
武藝の法世話強きをね放ふ。世の中は敗やとうりこき物

あり。昼夜文武とりめてせめるとい法世話づつよいと

てとうくいふ大ひあるあやまりあり。いかんとあまを文

武二道は連せずんを。よい士ひといいひがど。是は君子の

道ふ志て。よい氣の知る徳をあらぬ事也然るよ。世路は

人あり。是は依て止事を得ず法せとをやきあふあり。是を

とうく思ふは愚人と知るべし

又
 政殿侍老中の良法政道邪まふがう又よき事

もあり。越中守殿は法政教を志して又あんぎの者もこと

あるよし。ね放ふ。まがりても。お子の物をとらふあり。志

あやうでも。つぶす指こぎと真直まもる。天の道ふ志て

法津の善道あり徳を。志をあらう。いふ人の横道者也

いづと善人を助く。志を。悪人のあんぎする。いふたり

あり。天下國家を治むるふ。善人を助けて。悪人を罰

する。は政事の序定法也。政は正ありといふて正教道を

行ふ事あり。あやう。政の字の訳もあらぬ人のいふ事

也。悪政を悦ぶ人の。善政を悦ぶ人の。善人あり。

あふ。真直まもる。いといふ人の。いづと悪人と知るべし。

惡人^{セー}の傍^{ナド}りハ。汝^{ナニ}も必^{カナラ}よかけ^スる事^{コト}あり。唯^{ただ}正道^{ドウダウ}を行^スふ^ニ。

○又^{また}堯^{ヤウ}軍^{ジュン}記^キ琴^{シン}責^{セキ}の^もぢり^ふの^{どの}こ^ぶえ^{よく}と^いふ^も。是^{こゝ}を^さう^{ばう}と^いふ^ん。佞^{ネイ}の^{かち}多^{おほ}し^{とい}ふ^も。いと^まを^おさ^ばか^みし^とふ^ん。民^{タミ}を^勞する^事は^理ふ^ひと^し。こ^ゝを^かさ^る。こ^んさ^うふ^猶も^非道^{ヒドウ}ハ^いや^まし^のみ^ふ。う^ろう^き白^{ハク}川^{ケン}所^{ショ}當^{トウ}時^ジ采^{サイ}屋^ウの^玄采^{サイ}ふ^あく^がひ^てを^の上^{ジョウ}納^{ナツ}始^シま^りて^地主^{ヂヌ}の^災難^{ナン}大^{ダイ}ひ^よあ^て金^{キン}け^いハ^民ふ^おた^ふん^町人^{チヨウジン}の^商ひ^あく^とぢ^んも^さが^らぬ^采お^場き^てん^のあ^るし^とこ^ろや^さけ^ると^あら^うハ^東都^{トウ}の^人の中^{ナカ}ふ^も哉^カ中^{チュウ}を

を^恨む^とし^りた^るふ^相違^{チガイ}あ^り。是^{こゝ}を^しる^者の^あや^まり^{あり}。智^チの^惡人^{ニクジン}と^いふ^も。誠^{マコト}ふ^哉中^{チュウ}候^{コウ}ハ^人の^あら^ぬ所^{トコロ}し^る機^キの^分所^{ブン}方^{ホウ}あり^事生^{ナマ}じ^も。序^コ育^{イク}も^{よく}あ^て貴^キ賤^{テン}上^{ジョウ}下^カの^人情^{ニョウ}所^{ショ}能^{ノウ}近^{キン}も^{よく}あ^りふ^ふハ^古今^{コキン}ふ^あら^う姿^{サテ}大^{ダイ}智^チ者^{シャ}あ^るべ^し。卿^{ケイ}政^{セイ}事^ジの^大事^{ダイジ}ハ^下の^邪正^{ジャセイ}と^{よく}あ^るふ^あり^とハ^古語^{コゴ}よ^えたり^{。是}ふ^うけ^て。万^{マン}民^{ミン}の^人情^{ニョウ}邪^{ジャ}正^{セイ}と^{よく}あ^らい^て善^{ゼン}惡^{アク}と^をか^ねを^其理^リふ^背く^事あり^{。い}づ^とよ^あて^も。万^{マン}民^{ミン}の^邪正^{ジャセイ}と^{よく}あ^らい^て天^{テン}下^カ國^{クニ}家^カを^治む^べし^{。其}天^{テン}下^カ國^{クニ}家^カと^{よく}治^むる^ふハ^先我^ガ家^カを^{よく}治^めて^{。其}後^{ノチ}万^{マン}民^{ミン}を^治む^べし^{。我}身^ミだ^も治^むる^事あり

らずあて天下國家を治むる事^{きざ}の^{きざ}んや又貴賤上下の
 邪正をよく^{おと}わけて^{おと}。あごり^{おと}を^{おと}取ひ^{おと}。ぎ。儉約を^{おと}と^{おと}あて
 ゆか^{おと}秘を^{おと}万民の安か^{おと}あきと^{おと}あるべ^{おと}。ま^{おと}あ^{おと}裁中^{おと}の^{おと}あ
 ぐり^{おと}あ^{おと}つ^{おと}い^{おと}あ^{おと}う^{おと}い^{おと}あり。儉約を^{おと}あ^{おと}つ^{おと}と^{おと}あて。何^{おと}か^{おと}何^{おと}近
 も。^{おと}機^{おと}を^{おと}つけ^{おと}さ^{おと}せ^{おと}う^{おと}と^{おと}て。天下國家の安泰を^{おと}あ^{おと}かり^{おと}あ^{おと}あ
 り^{おと}か^{おと}た^{おと}さ^{おと}事^{おと}。い^{おと}上^{おと}あ^{おと}。皆^{おと}く^{おと}敬^{おと}ひ^{おと}奉^{おと}る^{おと}べ^{おと}。あ^{おと}か^{おと}。い^{おと}ま^{おと}り^{おと}世
 話^{おと}が^{おと}届^{おと}き^{おと}る^{おと}て^{おと}う^{おと}く^{おと}い^{おと}と^{おと}と^{おと}あ^{おと}事^{おと}も^{おと}あり。日本國中^{おと}。隨^{おと}か
 と儉約^{おと}と^{おと}せ^{おと}。く^{おと}い^{おと}口^{おと}と^{おと}へ^{おと}らせ。憤^{おと}鼻^{おと}を^{おと}六^{おと}尺^{おと}と^{おと}する^{おと}ハ費^{おと}つ^{おと}あ^{おと}り。
 三^{おと}尺^{おと}と^{おと}あ^{おと}て。二^{おと}筋^{おと}と^{おと}せ^{おと}。二^{おと}尺^{おと}と^{おと}切^{おと}て^{おと}三^{おと}筋^{おと}と^{おと}せ^{おと}と^{おと}あ^{おと}ま^{おと}り^{おと}世
 俗^{おと}が^{おと}届^{おと}き^{おと}る^{おと}と^{おと}あ^{おと}ふ。ふ^{おと}ん^{おと}ど^{おと}。の^{おと}名^{おと}を^{おと}裁^{おと}中^{おと}ふ^{おと}ん^{おと}ど^{おと}と^{おと}あ^{おと}たり。

大^{おと}名^{おと}様^{おと}と^{おと}ふ^{おと}ん^{おと}ど^{おと}。の^{おと}名^{おと}と^{おと}あ^{おと}と^{おと}。ひ^{おと}も^{おと}の^{おと}さ^{おと}あ^{おと}と^{おと}ふ^{おと}せ^{おと}と^{おと}。
 六^{おと}尺^{おと}の^{おと}木^{おと}綿^{おと}と^{おと}一^{おと}度^{おと}と^{おと}つ^{おと}い^{おと}や^{おと}と^{おと}事^{おと}あ^{おと}う^{おと}と^{おと}。二^{おと}筋^{おと}と^{おと}と^{おと}ふ^{おと}ん^{おと}ど^{おと}。
 ふ^{おと}ら^{おと}く^{おと}せ^{おと}と^{おと}。作^{おと}せ^{おと}と^{おと}と^{おと}た^{おと}あ^{おと}と^{おと}。つ^{おと}ま^{おと}。い^{おと}き^{おと}と^{おと}あ^{おと}い^{おと}。
 事^{おと}あ^{おと}。皆^{おと}裁^{おと}中^{おと}様^{おと}と^{おと}か^{おと}ぶ^{おと}せて^{おと}あ^{おと}ま^{おと}け^{おと}と^{おと}。あ^{おと}ま^{おと}り^{おと}氣^{おと}が
 つ^{おと}き^{おと}と^{おと}あ^{おと}ふ。色^{おと}と^{おと}あ^{おと}ふ。あ^{おと}ん^{おと}だ^{おと}い^{おと}と^{おと}か^{おと}ぶ^{おと}せる^{おと}。あ^{おと}ま^{おと}り^{おと}こ^{おと}ま^{おと}か
 ふ^{おと}。せ^{おと}と^{おと}や^{おと}く^{おと}べ^{おと}と^{おと}す。あ^{おと}か^{おと}。あ^{おと}ぐ^{おと}。裁^{おと}中^{おと}と^{おと}が^{おと}世^{おと}俗^{おと}や^{おと}き^{おと}と^{おと}あ^{おと}と^{おと}。
 す^{おと}ハ。六^{おと}尺^{おと}の^{おと}ふ^{おと}ん^{おと}ど^{おと}。が^{おと}大^{おと}方^{おと}今^{おと}に^{おと}い^{おと}ま^{おと}す^{おと}。又^{おと}式^{おと}尺^{おと}と^{おと}あ^{おと}り^{おと}ま^{おと}せ^{おと}う。
 又^{おと}今^{おと}の^{おと}女^{おと}を^{おと}い^{おと}ゆ^{おと}り^{おと}と^{おと}着^{おと}物^{おと}の^{おと}す^{おと}と^{おと}同^{おと}。一^{おと}様^{おと}と^{おと}あ^{おと}る^{おと}。是^{おと}
 又^{おと}何^{おと}と^{おと}い^{おと}ふ^{おと}事^{おと}と^{おと}あ^{おと}と^{おと}が^{おと}。裁^{おと}中^{おと}と^{おと}の^{おと}世^{おと}俗^{おと}や^{おと}き^{おと}と^{おと}あ^{おと}も
 法^{おと}を^{おと}万^{おと}也^{おと}又^{おと}裁^{おと}中^{おと}ふ^{おと}ん^{おと}ど^{おと}。と^{おと}い^{おと}ふ^{おと}と^{おと}ろ^{おと}。か^{おと}う^{おと}す。是^{おと}う^{おと}

ハ二尺のふんどし。三尺のふんどしとりふべし。是も大さふ
世話かむきさる

裁中ふんどしとりふ。え細川々の市勘合ともりふ能
ぬ束を舟るふ大さふより一の事あり。いづも本
といふをあらうず

裁中么ハ儉約を志てよの所でハ。けんやくと括をさふ。又つ
ふ括をあらうぬ野まてハ。かーげふくをひふふ大智者也。其
志中この天明八申の二月朔日二日。京都大火あり其時
禁裏も御炎上括をさせたり。とふよふにて大内裏
建立のゆき由 天子様より作せせたり。は大内裏

の儀ハ至でも重事也。二十六の宮殿ふ七十二の御門等
を建する事ふを中く莫太の法物入ふり容易の事
ふゆふどことふよふにて裁中么は上京つて時の関白
左大臣藤原氏と法相談の門て大内裏建立ふハ法枝木
をあらうむ事ふを中く十年や二十年ふハ成就ふこと
一。ことふよふにて先づかり御殿御造営也裁中么は返
る中色く法儉約の法法括をさふ一。ふふふき愚人
たハ裁中么と大さふ眼をたる事あり。又田沼候ハ當時愚
人たのよろこぶかうふ。御政事をふさふたるふ。後まよ
り等も。よろあきかうふ見たり。又裁中么ハ末のよいやう

ふと思召て京の者の至と通りふへるこねぬ。大ひふ
眼とたるやうするふり。こねふよりて。裁中候ふ裁度も何
らむ其分ふこゝかかぬと。よきとを知らふ人々も何り。丈
ちふ狂歌ふも。白川の清きふがきふ奥やせて濁まる田沼
今ぞこひきと。よきたる者也。実ハ京都も皆おごりふ長
トて。花美るる。裁中候ハ儉約をふさきたる者あり。実
ハ京都をよくせんと思召ての事也。あるよ。前のおごり
ハいらず。裁中があまりけんやくの政事を志こねふ。
金廻りがよくて。方々をふんぎさすると。眼とをふく
でえたりある。文政十亥の春



御仕官の御事

御名代と志て酒井左衛門尉松平裁中守松平二方の
上洛あり。時樂翁孫子息裁中守松平作せしむ
中ハ某一先年京都ふ於て。儉約の政事を致したる。
是京の者の為ふりあるふおごりを好む者たハ。時樂翁
を憎む居る者あり。其子の事ふさむ。何やうの恥辱を
興へんもあき。裁中難を直るふ。金根を除斗ふ
をふべ。是迄の御名代より。沢山をふべ。一あて
い所も。二あもきひ。二あてより。三あもみあもきふべ
。五すまを役義も首尾能つとまるべ。其用意して金

恨と次山持系すべしと。指界河川て。則ち上京ふ
こまける。子息哉中守極指界の通り云てよい所
つも五両もをひ。五兩てよい所つも七両も指あもをひひ
けとを。即名代の御役の首尾好相済申。其時京の者
程歎ふ。奥州で越中ふんどしをわあけて京名代は金
をふりたすと。よとふり京都へ流石歌所て程歎
も上ふようくむふり。是はよく遊をさまこと。始末とる
所よてハ始末をむこと。又きふてよいまよてハ。け
あくきひあふ大智者ふり。又樂氣極をけんやくどき
と思ふハ大馬遠ふり。けんやくどきふらうす。けんやくせ

孫を世の中が安ふふくせぬ也。樂氣極もふりハ
好ふま。夫でハ後ハ大災ハ大難候とふる。あふ止
事を得ずあてけんやくとこのまふ外ハ子細ふ
誰でもあごりのきういふ者ハ一人もふ。皆大好ふり
あごまをまけもふあてを持もよ。又えてまともい
けんやくもまをきうこふくえて。か持もりうい。ふま
あごまを初末大難候とふる。けあふ誠の智者ハあご
事をせざるふり。既ハ論語ふ子曰奢るときハ不孫也。
儉ある時ハ則ち固。其不孫あるよりハ寧ろ固
とけハ不孫とあごりて天地人ハを禮せんよりハ。あご

らむとて固い方が安かふとて。福德を得るより大事也。
是よりきまやうこふり。愚者の前後の考へもふりふ。
こるけとて賢者の前後の損益を志してふりふせぬ
ふり。是を遠きふりんとかりのり。賢人といふ。樂を
けんやくとてきよくす。けんやくとて世をけせが安か
ふりうせぬふり。夫をふりも前よりけんやくとて遊
むとて。又万民よりけんやくを教へふ。是安かふり
らさせんとて思ふ也。ふりうくく人々大六天の
魔王也。悲とすんばるべうとて。けんやくとて質素の君子
の道ふり。是の樂を極むかりふあらず。恐ふがう

様

様水戸美門様

様と始め奉り其

外の賢君方も皆儉約質素を好むふり。ありかたき
事也。是は日本をかりふりうす。天皇唐土の聖人方も
皆けんやくとてを好むふり

○格憲湯筆ふ天下國家の治乱の奢りと儉との二字
ふり。先祖の儉素とて興りふ。子孫の奢りて滅亡
す。漢唐宋明の勿論。其除の代々方も皆然り。治乱の大
体は千歳一徹あるべしとあり。是は向違ひる。昔の
聖人太王方の少しもふり。孝の事ふり。堯舜の二王
ハ。孝の事ふり。堯舜の二王ハ。

四百餘州の大王ふまゝにせしむる木のみをけづすが
やぶきの先をきく。若くは後候ふて置る。是ふて
其外の流けんやくへ思ひあるべし。

○論語ふ子曰禹ハ吾間然すること無飲食を蔬くあて
孝を鬼神に致し衣服を惡くあて義を黻冕に致し。宮
室を卑くあて力を溝洫に盡す禹ハ吾間然すること無
とけハ間然といふ物のすきまをく。そより野みきを
り。禹王の徳の全きなり。間然する事ふき内
ふ外ても。三事をあげて其大かゝるを述べす。常の飲食
ハ蔬くあて。父母の孝養鬼神の祭祀ふハ

力を尽し物といふていさぎよく。又常の衣服ハ
廉なる物を着て宗廟神先祖の神法奉ふハかんむ
り衣服等ハ極上の義廉を用ひ。又常の宮室居住
居ハいやしくあて力を田地の溝洫に尽し。ひでりの
時ハ水を引用をふ。又大雨の時ハ惡水を落す用
を盡さ。水損日損の災ひなく五穀の沢山に取
て民百姓のふんぎせぬ。又ふくふく。九と常人ハ衣食
住の三つハ義を尽す事最も切なり。ある禹王ハ衣食
住の三つハ至て廉なるあて。少くもあてり。事ふし。
天下の至る福德を我為し。あて。事ふし。皆万民の為し。

あまふ有りがたき事也。禹ハ吾間然する事ふーと。ふ
たびのあまハ深くやめあふ言ふふり。昔一の聖人
天子方かやうふ儉素を守りあふハ賤室のついで惜
あふあふ下。唯天地の間は生きて上下の品ハあまごも
同く是同胞の人ふり。あふ同胞の兄弟ふ衣食住を困窮
させて我獨り何の功德何のて衣服家宅をかごり美食
をせんやといふ道理を志して天の冥鑒を恐れて衣
食住をそへ儉ふあまふ是世界の万民ふんぎをさせて
我ひとり樂あまんやといふやふふり。是徳を積の本也
養生の術也子孫長久の基ひふり一切の智人ことを考へ

受あてあごりと被すべきか下
書經ふのうく。文王ハ卑服をて民ふ幸ひを樂あふと
り。又后き方ハかいことをかい。きぬをかり。君の衣服を調つて
世のいとあまをふーあふあふ平人のつまもとをて糸を
取らるる事もあふ下あまのこ縫事も出来ぬハ。
あまり不調法を益の女といふべー。日本唐土の大聖人
方。皆儉約質素を守りあふ況や其外の愚人た何ぞ身
か不ね食のあごりをするや不届といふべー。佛神聖人
方ふ。あごりとといふハ女ーもふー。唯吾智の小人ふり
かごりを好む。是がするふち吾智の看板ふり恥を事

あり。意度^{いど}悠々^{ゆうゆう}と云へ。序先祖^{しそ}の儉約^{けんやく}質素^{しつそ}ふ表て家^けをな
こし。五^ごひ子孫^{しそ}ハおごりて。國家^{こくが}を失^{うしな}ふと云へるも。る遠^{とほ}ひの
ふきこと也。左傳^{さでん}桓公二年^{くわんこうにねん}ふ清廟^{せいびやう}第^{だい}屋^{おく}越^こ席^{せき}采^{さい}米^{まい}其儉^{けん}
と昭^{あき}かす^さると云へり。けむ清廟^{せいびやう}とい序先祖^{しそ}方^{かた}のた^たまや
あり。ま^すさ^すもかやぶきふて。裁^{くさ}席^{せき}を志^しき采^{さい}米^{まい}とて序供^く米^{まい}
ハ^すあ^すら^すげたるをかりあり。是ハ序先祖^{しそ}方^{かた}もかくのごと
くふきむ。子孫^{しそ}たる者^{もの}。けん^{けん}中^{ちゆう}と表て^{あらわ}てふ^ふごる
益^{えき}う^うずと^とい^い教^{かう}へあり。是と其儉^{けん}と昭^{あき}か^かふ^ふす^すといふ也
有り^{あり}が^がき^き事^{こと}あり。子孫^{しそ}たる者^{もの}。序先祖^{しそ}の家^け風^{ふう}を志^し
度^どなるべ^べ。是ハ唐土^{たうど}の序先祖^{しそ}が^がをかりふあ^あらず。日本^{にっぽん}

の序先祖

天照皇大神宮^{あまてらすみこと}も又^{また}かくのごと^{ごと}。神代^{かみよ}の昔^{むかし}より。地^ち
形^{かたち}も^も垂^たす^す事^{こと}ふ^ふく。山^{やま}の行^{ゆき}さ^さかりあり。宮^{みや}倦^うり^り表^{あら}て^てや
孫^{みこ}も^もろ^ろふ^ふき^きあり。是ハ日本中^{にっぽんちゆう}の子孫^{しそ}ふ。お^おご^ごる^るふと
いふ教^{かう}へあり。是ハ倭姫^{やまとひめ}ふ序^{しそ}詔^{みこと}宣^{のたま}ひ^ひて。ろ^ろふ^ふき^きふ
は^はす^す事^{こと}也。神^{かみ}皇^みの私^{ひそ}ふ^ふあ^あらず。天照大神^{あまてらすみこと}の思^{おも}召^{めし}
ふ^ふり。こ^こを^を歌^{うた}ふ^ふより人^{ひと}あり。身^みの^のや^やど^どを^を志^しき^きと^と教^{かう}
へ^へ。伊勢^{いせ}の神^{かみ}今^{いま}ふ^ふろ^ろや^やの^のま^まふ^ふす。と^とふ^ふより^{より}ハ^ハ同^{どう}
遠^{とほ}ふ^ふ。日本^{にっぽん}第一^{だいいち}の序^{しそ}神^{かみ}序^{しそ}先祖^{せんぞ}の事^{こと}ふ^ふを^を柱^{はしら}も^も美^み金^{きん}家^け
根^ねも^も美^み金^{きん}。何^{なん}も^もか^かも^も美^み金^{きん}ふ^ふて^てこ^こら^らて^てふ^ふかる^{かる}べ^べ。ふ^ふる^るふ

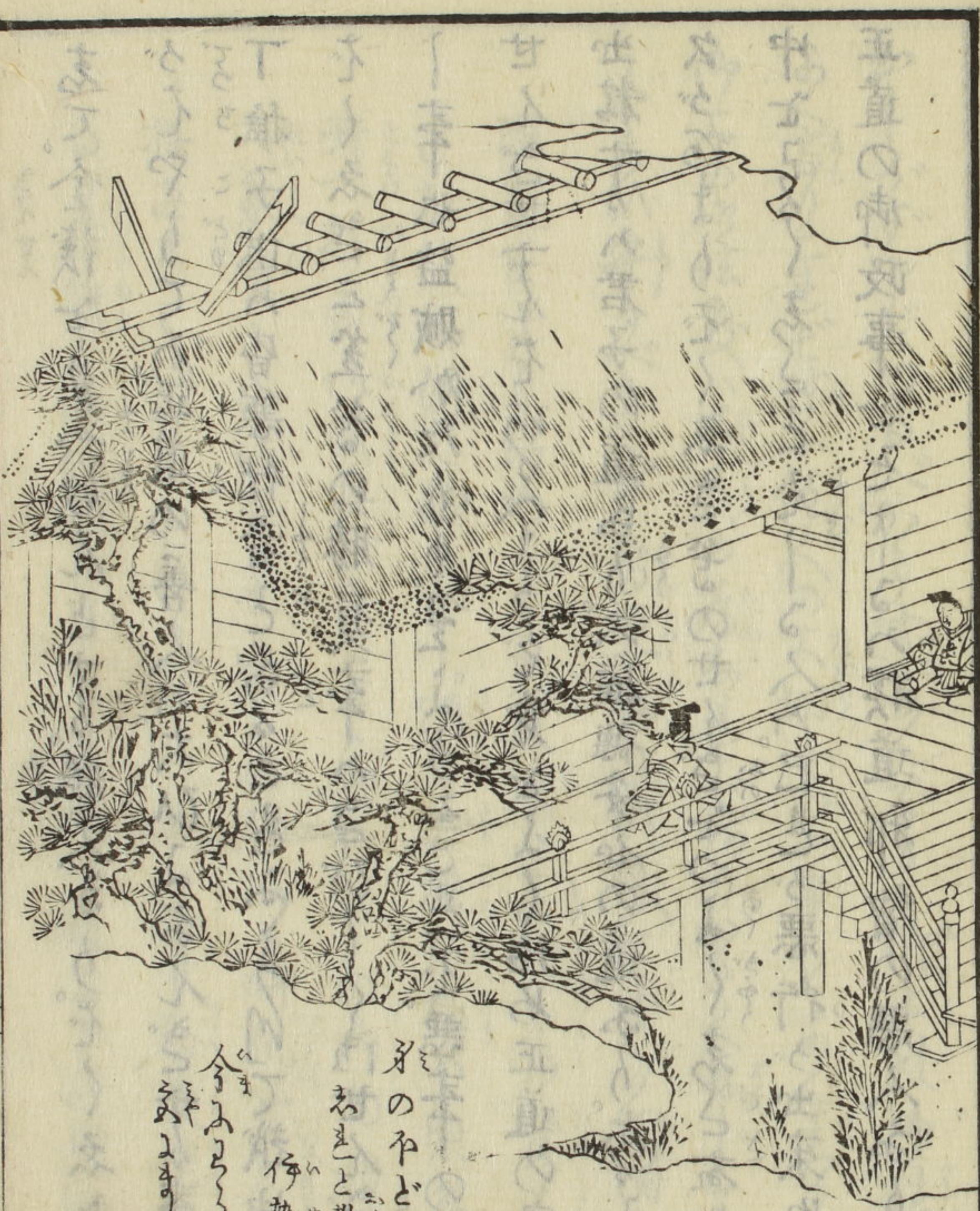
三つふきの宮は神座ことへ儉約質素の道を諸人ふま
めさんとの思ひ召ふり。誠ふけ上もふき。何りかこき事
ふり。諸人ふ貪るふんぎをさせまいぬのか。一ふり一切
の人民は教へて度ちり奉るべし。け教へてある人へ
福德へ預るふて来るべし。又毎日の供米へ唯三升
ついたる黒米は生涯の神菜ふり。是よて少くもふご
りふまぬ事とよくあるべし。今時のうら屋の者もかきふ
ふ何ぞや。吾智のい虫た。かごりふ長ト榮曜榮花を好
む。身の程をあらぬ。大悪人貪るふんぎする。咎ふり。さけ
と咎むべし。日本の神先祖 天照皇大神宮様唐土の神

祖方も。皆子孫よけんやくとさせて。天地自然の清浄ある
福德をうけさせんとの教へあり。何りかこきたまひのふり。
子孫たる者けつあてふるべし。若ふこを私神聖人
よけつとて天地の間は身の置るべし。是よて
てかごりふ身持。不精ふきやうみすべし。かごりの一事へ
大悪の根本あり。乞食とある下地ふり。け事をよくあら
ばたとひ何やうの事ありた。かごるふふき咎ふり。ある
ふかごる。やけ。吾智の大悪人也。畜生よりかかとりと
るべし。かごる。貪るふて。花はこれめ。人へ只。いんをこの
める人とあるべし。貪るふて。有徳ある人の眞似する。子孫貪る

ある相とあるべし。け二首の秋とよくあるべし。おごりを好
む人。貪ひんを好む人ふね遠る。かやうな道理ある。戒中
のきついはきつういふり誠又戒中の中にある人む
りあつた。あまり貪ひん苦のあつたべし。皆おごりとおぼさ
けんやくと弟一と被しある世の中へ富貴安むある人
。まゝ引うて皆の者たが向ふえずふねなるから志て上
下たふ貪む難儀千万也。け道理を能く考へて。おごるぬや
うとべし。若向ふえずふねなる人あつた。何との始末生
む志て。いやとも貪む難儀のがまがとこまふよつて
佛神聖人有智の人へ。皆けんやく志つておごりある

哉中々のおごりを取りいざけんやくを爲つと云ふも
 又法をあらうずや。世よりけいどろがとき法人ふり。是をうろく
 りふ人の。全智の悪人也。刑罰ふらふた可あらん。哉中々法人
 あまた長けまのまゝ。示るふ愚人たがひふ事をきけむ。天明
 年中の御政事のゆるやうふ表てむく名き。三笠等も。甚
 かうふ法せんぎふきあら。浅まうりも。大さふよろかり
 一ふ。哉中々があまりさびあふをせし。けんやくを
 あとをふ。浅まうりぐろくふけて。世に統一統のふんぎふ
 りといふ。天明年中の御政事をやめて。寛政年中の御政
 事をうろく。いふやうの何と悪黨者也。是の道あらぬ事を

天照皇太神宮



天照皇太神宮
 今みろくやの
 伊勢の神
 ありま
 ます

奉^{サヘ}。堯舜^{サカス}の世^ヨもか^サらる^{マド}き。仁政^{ニセイ}と皆^イかん^トける。
 津^ツの国^{クニ}難波^{ナニハ}高津^{タカツ}の^ミま^ニ倭^{ヤマト}せ^ムま^ニ立^タ位^イ八十七^{ヤマト}年^ノ亥^ノ正月^ノ。
 廿六^ニ日^ノ百四十^ノ才^ノふ^テ崩^{クニ}御^ミ。又^{マタ}八幡^{ヤマト}大^ノ和^ノ三^ノ月^ノ四^ノの^ミ御^ミ子^ノ。
 あり^{マコト}誠^{マコト}ふ^リが^コき^ニ。天皇^{テンノウ}也^{ナリ}。民^{タタ}の^ミ父母^{フボ}と^シふ^リか^ル。仁政^{ニセイ}。
 の^ミ御^ミ人^ノこ^ソふ^リを^シけ^ス。又^{マタ}天智^{テンチ}天皇^{テンノウ}の^ミ秋^ノの^ミ田^ノの^ミ御^ミ製^ノを^シ。
 百人^{ヒヤクニ}一首^ノの^ミ卷^ノ頭^ノは^ナく^モ。民^{タタ}を^シむ^スむ^スより^カら^ルとの^ミ奉^{サヘ}。
 百人^{ヒヤクニ}首^ノの^ミか^ウを^シす^クふ^エて^コり^ニ。万^{マン}民^ノの^ミ上^ノに^タ立^タ人^ノく^ハ民^ノを^シ。
 何^{ナニ}も^モむ^スむ^スを^シく^フん^ノあり^ニ。ある^ニふ^リ民^ノの^ミ物^ノを^シむ^スざ^リ。
 ふ^ンぎ^ノを^シせ^スる^ニ。天^{アメノ}の^ミ罪^ノ人^ノふ^ト。
 ○又^{マタ}中^{ナカ}宮^{ミヤ}被^レ畧^レ解^レふ^ニ。天^{アメノ}皇^ノの^ミ御^ミ製^ノふ^ニ八^{ヤマト}雲^ノ立^タ出^デ雲^ノ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノ。

妻^{ツメ}孫^ノふ^ニ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノ造^ノる^ニ其^ノ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノと^シは^ハ八^{ヤマト}雲^ノと^シハ^ハ八^{ヤマト}家^ノの^ミけ^ニ。
 む^リを^シふ^リ立^タと^シハ^ハ竈^ノの^ミ旅^ノる^ニ形^ノ勢^ノを^シふ^リ出^デ雲^ノと^シハ^ハ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノと^シハ^ハ八^{ヤマト}家^ノの^ミけ^ニ。
 の^ミふ^テハ^ハ後^ノ絶^ノ侍^ノる^ニふ^リ出^デ雲^ノと^シハ^ハ八^{ヤマト}家^ノの^ミけ^ニ。次^ノ才^ノふ^ニ国^ノ。
 家^ノひ^リけて^ニ。榮^ノる^ニふ^リ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノと^シハ^ハ八^{ヤマト}家^ノの^ミけ^ニ。妻^{ツメ}孫^ノ。
 と^シハ^ハ人^ノの^ミ道^ノハ^ハ男^ノ女^ノの^ミ二^ノより^ニ生^タて^テ。夫^ノ婦^ノの^ミ道^ノを^シふ^リ。又^{マタ}。
 子^ノ君^ノ臣^ノの^ミ礼^ノ義^ノを^シ立^タ陰^ノ陽^ノの^ミ理^ノ備^ノり^テ男^ノハ^ハ耕^ノて^テ外^ノの^ミ。
 事^ノを^シふ^リ。女^ノハ^ハ紡^ノ績^ノて^テ内^ノの^ミ事^ノを^シ脩^ノる^ニの^ミ義^ノを^シ以^テ妻^{ツメ}孫^ノと^シハ^ハ。
 り^ハ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノ造^ノると^シハ^ハ。始^ノめ^ニ一^ノ井^ノの^ミ田^ノを^シ發^ノく^ニを^シふ^リ其^ノ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノと^シハ^ハ。
 垣^ノと^シハ^ハ其^ノ上^ノより^ニ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノを^シ造^ノり。又^{マタ}上^ノより^ニ八^{ヤマト}重^ノ垣^ノを^シ造^ノり。
 終^ノに^ニ三^ノ十^ノ三^ノ里^ノ余^ノの^ミ一^ノ路^ノと^シある^ニを^シ統^ノ一^ノと^シふ^リ序^ノ調^ノ也^{ナリ}。

又八雲立といへ。高天原八家の里人竈ふ飯を炊くけむ
りとす。下民繁昌といふ雲といへ地氣蒸昇けりてたふ
引物也。けむり火氣の殺するふりけむりのありさま。
雲より似たるを比えて雲といふ耕田のひらけ重なるありさ
まといふ。天の八重を云といふも。天降ふをびこりたる深雲
をいふ。八重を云を排分てといふもけ義あり。けりせしむ万
民のかまどの賑ひ榮つるを悦びふ。けりけりといふあり
へも。禍の屍より出づる事也。何より。不禍の屍をやかす
志て。半々。残食福たふ。いふ。いふ。出束が。人命を持け
の根本ふを。左も。いふ。べき。苦の事あり。是を篤とあらざる

人の世の中の輕重損益歎味方とあらざる人あり。吾
のけ上ふ。

昔一の聖王年貢を取ふ。十一の法あり。井田の法は
り。十一の法といふ。十の法。十一の法。取ふ。事也。井田の法
といふ。井田。上。年貢。と九。分。一。差。上。て。八。分。の。百姓。が。取。る。事
あり。は。八。雲。立。の。歌。に。井。田。の。法。を。い。ふ。也。一。井。と。い。ふ。其。田
九。百。畝。也。其。中。の。百。畝。を。公。田。と。い。ふ。て。井。上。一。差。上。る。所。の。田地。也。
は。田地。を。八。人。の。百姓。が。寄。合。て。作。り。其。物。成。を。皆。井。上。一。差
上。る。ふ。り。其。外。の。八。百。畝。を。私。田。と。い。ふ。て。百姓。より。さ。る。所
の。田地。ふ。り。其。田地。を。八。人。の。百姓。が。作。り。取。り。取。り。志。て。妻。子。け。ん

よくを養ふふり。是は周の文王の法年貢を所取ふこと
所の定法也。は余はふふらむ。少くも少く事ふ

私田	私田	私田
私田	公田	私田
私田	私田	私田

中の一分は公田といふて御上へ差上る。その
田地ふり外の八分は私田といふて八軒の百姓が
所り取りて妻子供んどくを養ふ也。ことしを
井田の法といふは昔の年貢の御定法也

唐土も當世は四公六民の税法にて上下は其所を得た
是聖人井田の良法と同一事也といふ四公六民と
いふは四分御上へは年貢より上納はり六分は百姓が所
ひ申す事ふり。今日日本の制度も是は當るといふ人あり。

は年貢の事が御政事の根源ふり。は年貢をよど
取て御上も過の所をやいて悪徳者の詮儀を志て。
下民を安養し家業を世継せしめぬ。又下
へ百姓は年貢をよどよく納めてを残りてり。
過の所をよき妻子供んどくを養ひ田地を耕作せ
るをふらぬ。上下は過の所の安をよける事ふするを。
御政事の第一とする所也。貴賤は過の所が身分相應
やけど志ては安をふらう。が過の所の安をふらひ
るふらぬ。といふはよくかこり。火舟人殺し等の悪徳者
が多く出来て世を治めんと欲すといふとも治る事ふ。

是も依ては年貢の取引の政事の本根也。万民が苦勞を
 一に家業を世帯として家来けんどくをせよ。中へみせ
 孫をあらね。万民の竈にけむりが立ず。あてて天下泰平
 國土安穩といひ。さう。丈夫高き家の御製も尻より
 出たり。貴賤貪福に禍の尻より。とりと一切の本根を一口お
 て。あらせたる。奇妙不思議の御詞あり。け作せよ。よく考
 へて人々より。飯の沢山ある。すうふとべ。飯がふくて。仁
 義禮智信も。忠孝も。出来ぬとあるべ。禮入る。ふ成て。
 ふさふ敗。もと。同遠。ふ。能く。又。あて。飯のある。す
 ふとべ。一軒の家を相續する。を。煙を立るといふ。けむりが

立ぬ。すうふと。家へ。絶とあるべ。煙り立の。即せい
 と。今の世までも。貴義する。何。おや。一切人間の世を。送
 る。本ある。ふ。け。事。篤とある。ふ。飯の用
 意。せぬ。あて。中。貪福に。禍の尻より。
 と。氣の。すうふと。い。め。言。ふ。人々
 あり。が。存。て。禍の尻が。安く。か。け。す。ふとべ。
 政事の。肝要。智仁勇の。三徳。奉行役人。を。あ。て。こ
 万民を。安。ふ。養。ふ。あ。む。る。ふ。あり。万民を。あ。ふ。ふ。食
 と。以て。弟。と。す。食。が。沢山。あ。く。あ。て。入。教。も。禮義も。個。ひ
 が。丈夫。論語。も。子。衛。ふ。適。丹。子。僕。たり。子。曰。庶。の。

素人画

② 左様く、何うもふふい
 のまがま月さきつたけ。
 税支不税支ともふ。
 らいのとむせすあてふ。
 用入御ひぐー。
 あぬーがふくてみ。
 むづうまいとけ。
 おやのんぐも。
 のまのぐもふい。
 たをこがふくてこ。
 そうぞうしいいんや
 せひともふ入用か。
 と小まひがふくてのれ。
 もお茶も、おまぐー



③ 二ーら、おめーをいろうたべや。
 直ふふうへる。又たむこと漏れす。
 こーのるのますふいこと直ふ。
 痛八百のそふいの表やをせうい。
 ア、又後ふへい。さう後をつ。



④ 中々作の通りふ
 おまふー。又、後食。
 後とも入。湯の尻を。
 やうすあてふ。何うも。
 出まふ。又、何うも。
 の。物。ハ。全。浅。ふ。り。何。故。と。
 小まふい。と。世。界。ハ。く。う。や。う。

哉。丹有が曰。既ふ庶あり。又何さう加ん。曰。こまを富さん
既ふ富り。又何さう加ん。曰。こまを教ふんといひ。けふハ
孔子衛の國を通りぬる時。丹有といふ弟子僕をして
車の傍にあり。孔子衛の國の人民の多くあり。を
とひて。我衛の國の人民がけりて。よき國あり
とのふつむ。供の丹有がけり。庶くの人民あり。是を
よく治むるふ。何を以て先とせんと同じ奉む。先
租税を薄くし。下民を富し。ゆたふせんとのふ。
既ふ富たる時ハ。又いかにばさん。孔子のむく。富たる
上ハ民ハ仁義禮智信を教ふん。人とあて教ふけむ。

禽獸も同一けふ。學文をこせて人の人たる道を教ふ
とあり。先富をば教ふも禮義もやどこが。この
序あり。ふらハ禮義のあり。成てふきふむする事
疑ひふ。

○孟子曰く。民水火の非ざるを生活せず。昏暮ハ人
の門を叩て水火を求る。與へざる者あり。至て是をふり。
聖人天下を治むるふ。菽粟有ること水火の如くあり。あむ
菽粟水火の如くふ。あて。民焉ぞ不仁ある者有ん哉。とい
り。けふハ民の賊室を富むる事ハ仁政の本たる事を論ず
民水火ふけむ。一日も生活て居りが。水火の二ハ万

民日用の急きんある物ものは甚たて甚たと大切たいせつある物ものも大おほ若わか人
河川かへんで日ひの暮くる人ひとの門かどを叩たたて水火すいふくを求もとむることも興おこむと
奉ほうず。こゝに至いたて沢山たくさんみゆること也なり。蔽粟ひきり沢山たくさんみゆること奉ほうず水火
のごとくあることも甚たと万民正道ばんみんしんどうは甚たと不仁ふじんある者ものあり。
仁義じんぎ人ひとの本もとを失うしなふといことども。賤用せんよう且かつざる時ときは士君子
といことども其本そのもとを失うしなふ者もの多おほし。いことらんや小人せうじんは於おてを
やあことくをこと我われを富とみは有あて。ふきよことは敗ます。是こゝよりことて聖
人天下てんかを治さむること先民せんみんの食ををことつとことあることあり

日用心法 三編上 終



